

今こそ、「自分のために走るのだ。」

という強い意志と感謝の気持ちを持って！

山本啓子（仮名）選手に捧ぐ……。

2年生の長距離部員として活躍する山本拓郎（仮名）の姉、啓子さんが12月13日の未明、苦しい闘病生活の末、逝った。現在、彼女は春日丘高校の3年生に相当する年齢、あまりにも早い旅立ちであった。山本啓子さんは中学時代、茨木西中陸上競技部員で、現在に至るまでの茨木西の全盛期をつくりあげた一人であった。彼女は入学してから長距離部員として活躍し、1年生の時の秋季総体大阪大会では1年女子800mに出場し、2分31秒の記録で8位入賞。駅伝でも活躍するかたわら、3年生の時の通信陸上大阪大会では砲丸投げで8位入賞。続く雨中での戦いとなった大阪中学選手権では12m14の大記録（この記録は全国大会出場のための標準記録まで、わずか16cmだった……。）で見事に4位入賞を果たしたという輝かしい実績を持つ。後に、成蹊女子高校に陸上推薦で進学した4人の部員と共に参加した成蹊の練習では、見よう見まねで投げた彼女の円盤の軌跡を見た顧問の先生が「こんな（中学生ばなれした）投擲をする中学生の女の子がいたんですね。」と目を丸くされた程であった。実際に先生も「この娘は、将来日の丸をつけて競技するんじゃないか。」と思うくらいの将来性豊かな素質を持った大選手でした。さらに、彼女のスーパーウーマンぶりは陸上以外のところでも存分に発揮された。懸垂を10回くらい平気でやってしまうくらいの並みはずれた運動能力と体力であったから、水泳の腕前も一級品！（水泳部顔まけの泳ぎっぷりは今でも目に焼き付いている。スキーの腕前はもっとすごいらしい!!）さらに柔道の心得もあった彼女は選択の授業の柔道では男子を平気で投げとばす圧巻ぶりだった。がんばり屋で天真爛漫な性格。そのくせはにかみ屋のところもあって、少しピントのずれた？ところも憎めない、人なつっこい笑顔が印象的な彼女でした。

思えば、2年前の夏頃、彼女から突然電話があった。「先生、毎朝安威川で走っているんでしょ。今度、私もいっしょに走っていいですか？」と屈託のない声。次の日の朝、自分が今陸上部と柔道部のかけもちをしながらがんばっていることなどを聞きながら40分程いっしょにジョッグをした。それから、しばらくして彼女が難病を患って入院したことを知った……。

「若さ」というのは健康の代名詞だと思っていたし、彼女こそ病気とは無縁のスポーツウーマンと信じて疑わなかったのが突然の知らせに絶句した。その後、

何度か病院に見舞ったけど事態の深刻さに言葉を失った。時には、無菌室で横たわる彼女を見て、陸上部の近況や昔の思い出話をするのだけど、逆に手前の健康や幸せな日々を見せびらかすだけに終わってしまう危惧と、何もしてやれない自分の無力感に自己嫌悪に陥るばかりとなった。彼女の入院していた美穂が丘の阪大病院の病室からは、万博競技場や万博自然文化園が眼下に広がる。「こっから、駅伝走っているのが見えるかもしれないので西中を応援しています。」そんな言葉が、今自分の頭にこびりついています。彼女のあまりにも早すぎる旅立ちについての無念さはともかく、今となっては自分と泣き笑いを共にしながら、彼女が生き生きと輝いていた時間を共有できたこと、そして、たくさんの名場面や喜びを分かちあい、自分自身の生き方についても有形無形の勇気を与えてくれたことに心から感謝しています。そして130名の部員と共に、今自分が好きな陸上競技にとことん打ち込める環境であることにあらためて感謝したい。自分は彼女に何もしてやれなかったけど、せめて彼女のはなむけのためにも、精一杯陸上競技に打ちこんでいこうと思う。(彼女の分まで!!) きっと、彼女も空の上から茨木西中陸上部の夢無限大ストーリーをめいっぱい応援してくれることでしょう。だから、だからこそ、日々「気をつけ」「礼」「お願いします。」謙虚に誠実に生きていこう。彼女、山本啓子さんのご冥福を心よりお祈り申しあげます。一合掌一。

上の文章は5年前に、彼女の訃報を聞いた時に先生が書いた陸上部通信の文章である。彼女の葬儀の時には歴代の部員たちが集まり、彼女の棺の中にユニフォームやシューズもしたためたことが昨日のように思える時もあります。

なぜ、今ここにこの文章を掲載したのかというと、「今、自分が陸上競技に打ちこむことができることの幸せ」を東雲中陸上部のみんなにもわかってもらいたかったからです。毎日練習できるのは、君たちの保護者の理解や協力があるからこそ、だから陸上の記録を向上させることだけを目指してはいけけないのだ。陸上をがんばることが、人間的にも大きく成長することにつながらなければならない。陸上以外のことにも、勉強だって、クラスの仕事だって、家事の手伝いだって生き生きと輝いてできるようになることです。

また、陸上競技は、一見単調に見えるが奥の深いスポーツです。何よりも大切なのが競技に対するモチベーション（動機づけ）です。ひょっとしたら、「走る」意欲をなくしたり、がんばる気力を失いがちになったりする人がいるかも知れません。時には、純粹に総合優勝目指してチームのために走ることが重荷に感じたりすることがあるかも知れません。究極には、自分のために走るのです。こんなにも素晴らしい魅力的な競技に出会えたことに感謝し、今この時この一瞬を大切に練習してたくさんの感動を味わって欲しいと思っています。